

IV. 高大接続研究センターの活動

1. 2022 年度活動報告

高橋 まりな

(1) センターの体制

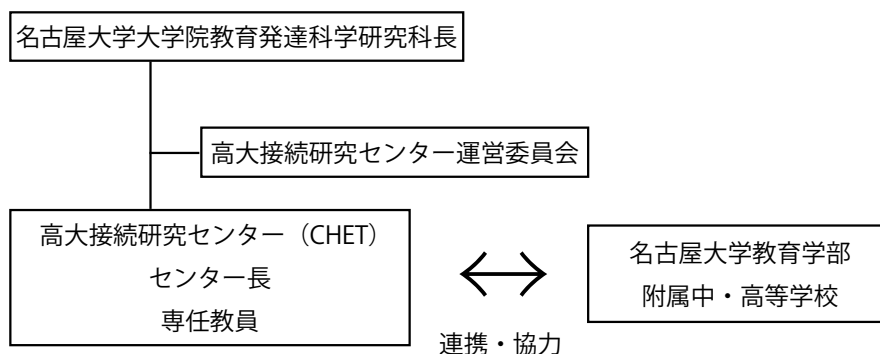
センター長は引き続き柴田好章教授が務めた。昨年度末で大谷尚特任教授が退職し、プロジェクト・アソシエイトだった高橋まりなが今年度より専任教員（特任助教）に着任した。センターの業務についての実務的な会議は、柴田センター長と専任教員が週 1 回程度必要に応じて開催している。2022 年 10 月 3 日と 2023 年 2 月 28 日に運営委員会を開催し、事業報告と今後の調査・研究方針についての審議を行った。

〈2022 年度 高大接続研究センター運営委員〉

氏 名	所 属
柴 田 好 章	大学院教育発達科学研究科教授，高大接続研究センター長
辻 浩	大学院教育発達科学研究科教授，教育学部附属中・高等学校長
生 澤 繁 樹	大学院教育発達科学研究科准教授
野村 あすか	大学院教育発達科学研究科准教授
光 永 悠 彦	大学院教育発達科学研究科准教授
高橋 まりな	大学院教育発達科学研究科特任助教
三小田 博昭	教育学部附属高等学校副校長

(2022 年 4 月現在)

〈高大接続研究センターの組織図〉



(2) 活動報告

現在高大接続研究センターでは、①高大接続に関する研究、②高大接続入試に関する研究、③中等教育に関する研究、④新たな高大接続研究カリキュラム開発プラットフォームの構想、⑤高大接続に関する事業の実施に取り組んでいる。

①高大接続に関する研究

紀要の刊行

2023年3月にセンター紀要第8号(本誌)を刊行した。今年度からの試みとして、センター研究員に寄稿を依頼した。

機構構成員向けセミナー

「『高大接続』とは何か 教師になろうとするひとに考えてほしいこと」

研究成果を全学に還元する試みとして、2017年度から毎年「教職を志望する名大生のための『高大接続』セミナー」を開催している。日程は東海エリアの教員採用試験の前になるようにという配慮で6月25日・26日にオンラインで実施した。また、今回よりタイトルを変更し、参加募集の範囲を名古屋大学構成員から機構構成員に拡大した。

②高大接続入試に関する研究

シリーズ「テストと入試をめぐる座談・快談」を通じた研究テーマ・論点の探索

2022年度は例年のような1回完結のシンポジウムではなく、座談会形式の公開学術討論シリーズを企画した。当センター研究員の大谷尚氏、大塚雄作氏、村上隆氏に継続して登壇をお願いすることで、対話を通して探索されたテーマが次回以降に引き継がれ、回を重ねるごとに深まっていくことを期待している。

第1回座談会が9月29日に開催され、話題提供者は大谷尚氏、テーマは「米国の大学入学者選抜との対照を通して検討する日本の大学入学者選抜の特性・問題・課題 ―アメリカの大学入学者選抜を観ることで日本の大学入試が視えてくる―」であった。

③中等教育に関する研究

附属学校におけるWWLカリキュラムの共同開発

柴田センター長が「文部科学省WWLコンソーシアム研究開発事業の運営に関わる2022年度第1回WWL運営指導委員会」(7月8日12:30-14:30)に出席し、カリキュラム計画に関わる助言を行なった。その後も協力を継続している。

愛知県立連携型中高一貫校の設置に関する情報収集

柴田センター長が研究科長とともに、愛知県立連携型中高一貫校の設置に関する情報収集・助言を行っている。県教委の総長への訪問に同席し(8月24日)、その後も関係者と協議を行なった(12月23日・2月6日)。

④新たな高大接続研究カリキュラム開発プラットフォームの構想

昨年度までに項目「④新たな大学入学者選抜の開発」として取り組んできた「附属学校から名古屋大学へのグローバル人材育成を目的とした高大接続入試の実現」は、名古屋大学の第3中期目標の記述「K10 海外拠点等を活用し、海外の中等教育機関との連携を強化し、優秀な留学生の確保ができるよう、推薦制度の導入など選抜方法等の改善に取り組む。」を根拠に設定

された。しかし2017年度からの入学定員における留学生人数の扱いの変更や留学生教育についての本学のミッションについての再検討などを背景に、大学本部が第3中期目標からこれを削除したため、本研究科と本センターとしてもこの事業の直接の実現は断念した経緯がある。今年度は第4期中期目標計画に入ったことを踏まえ、附属学校と当センターで新たな構想を策定し、総長・副総長との懇談会（10月4日）で提案した。

⑤ 高大接続に関する事業の実施

附属学校AW（アカデミック・ライティング）講師派遣

これから課題研究に取り組む高校1年生を対象に、高橋特任助教が1時間分×3クラスの講義を行った（4月26日）。

一日総合大学（附属学校と共催）

自己の進路を自覚的に選択するキャリア形成教育の一環として、名古屋大学の各学部の教員から附属高校生徒へ、教育・研究内容について紹介するイベントである。新型コロナウイルス感染症の流行により2020年度は中止に、2021年度はオンデマンド形式の動画配信による開催となったが、本年度は2年ぶりに対面で開催した。ただし、2019年度以前は高校1・2年生全員が参加していたが、本年度は2年生のみに限定した。

学びの杜・学術コース（主催）

高校生向け講座「学びの杜・学術コース」は、名古屋大学の教員を中心とした研究者たちが、それぞれの学問領域における大学レベルの「学び」を体験する機会を高校生たちに提供するもので、2005年の開始から18年目を迎えた。

2019年度以前は愛知県内外の高校・高等専門学校から参加者を募集していたが、2020年度は安全を考慮して参加を附属学校の生徒に限定し、大部分をオンラインで実施した。2021年度はWWL連携校5校の生徒に受講者を広げ、オンラインと対面で実施した。

2022年度は申し込み可能な生徒の範囲をさらに拡大し、6つの学校から102名が参加した。前年度と同じ完全なオンライン・対面のほか、オンラインと対面のハイブリッド形式で開催した講義もあった。

附属学校の生徒は1コマ120分の講義に10コマ出席すると、附属学校で高校の単位認定を受けられる。2021年度は受講者全員が単位認定を受ける前提で参加するよう、10コマ以上の受講希望者からしか申し込みを受け付けなかったが、2022年度は1コマから申し込めるようにした。この影響で、申込者数は88名から102名に増えたが、延べ受講者数は960名から388名に減少した。10コマ以上出席したのは16名（うち附属生徒12名）であった。

附属図書館との連携事業（附属図書館調査学習支援グループと共催）

学部新1年生が大学での学びにスムーズに移行できるよう支援する目的で、附属中央図書館情報サービス課情報リテラシー係とのコラボレーション企画による初年次生向け講演を行った。2021年度は本学構成員に参加を限定したが、2022年度は岐阜大学の学生にも参加を募っ

た。講演会は4月20日に開催され、その後、学内限定で動画を公開している。タイトルは「高校での学びと大学での学びは何がどう違うのか」、講師は前センター長の大谷尚先生が、進行役は当センター特任助教の高橋まりなが担当した。

また、同系の大学院生スタッフが毎年春学期に開催する、新入生向けのライティング・プレゼン講習会「これだけ講座」の教材づくりと講師のトレーニングに参加した。この講座は2014年から継続して毎年4-5月に開催しているもので、当センターが関与するのは2020年度実施の第7回以来3回目である。また、この講座の内容を元に作成されたテキスト「アカデミックスキルズ:大学生ならこれだけは知っておきたいキホン」に監修として参加し、4月11日に機関リポジトリで公開した。